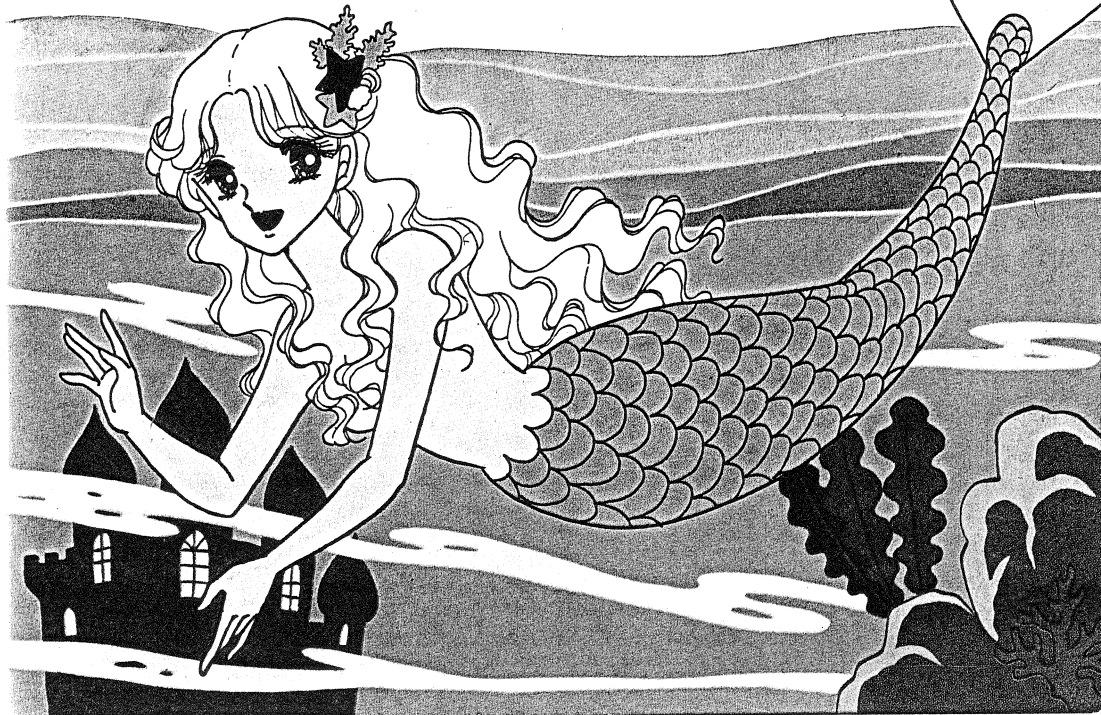


# にんぎょひめ



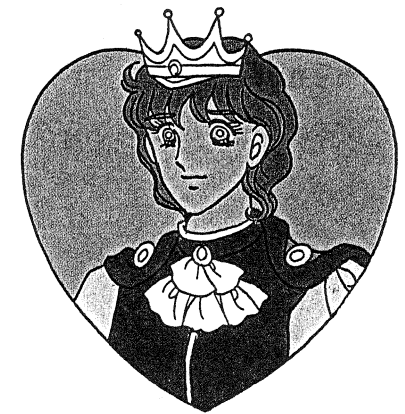
名作アニメ絵本シリーズ

⑧ にんぎょひめ

永岡書店

- ①ながぐつをはいたねこ  
シャルル・ペロー作
- ②シンデレラ  
シャルル・ペロー作
- ③イソップものがたり  
イソップ作
- ④しらゆきひめ  
グリム兄弟作
- ⑤三びきのこぶた  
ジェイコフズ作
- ⑥おやゆびひめ  
アンタルセン作
- ⑦みにくいあひるの子  
アンタルセン作
- ⑧にんぎょひめ  
アンタルセン作
- ⑨あかずきんちゃん  
グリム兄弟作
- ⑩おおかみと七ひきのこやぎ  
グリム兄弟作
- ⑪小公女  
パーネット作
- ⑫ピーターパン  
バロウ作
- ⑬青いとり  
メーテルリンク作
- ⑭赤いくつ  
アンタルセン作
- ⑮はくちょうのみずうみ  
チャイコフスキー作曲より

- ⑯かちかち山  
日本昔話
- ⑰さるかにばなし  
日本昔話
- ⑱一休さん  
日本昔話
- ⑲かぐやひめ  
日本昔話
- ⑳ももたろう  
日本昔話



永岡書店 / 定価360円 (本体350円)  
ISBN4-522-01598-4 C8076 P360E





うみの

そこに

にんぎよの

おしろが ありました。

おしろでは うつくしい にんぎ

よの おひめさまたちが、やさしい

王<sup>おう</sup>さまと おばあさまに かわいが

られて、しあわせに くらしてい

ました。



にんぎよひめは

十五さいの

たんじょう日がくると、

うみの上に 出ることがゆる

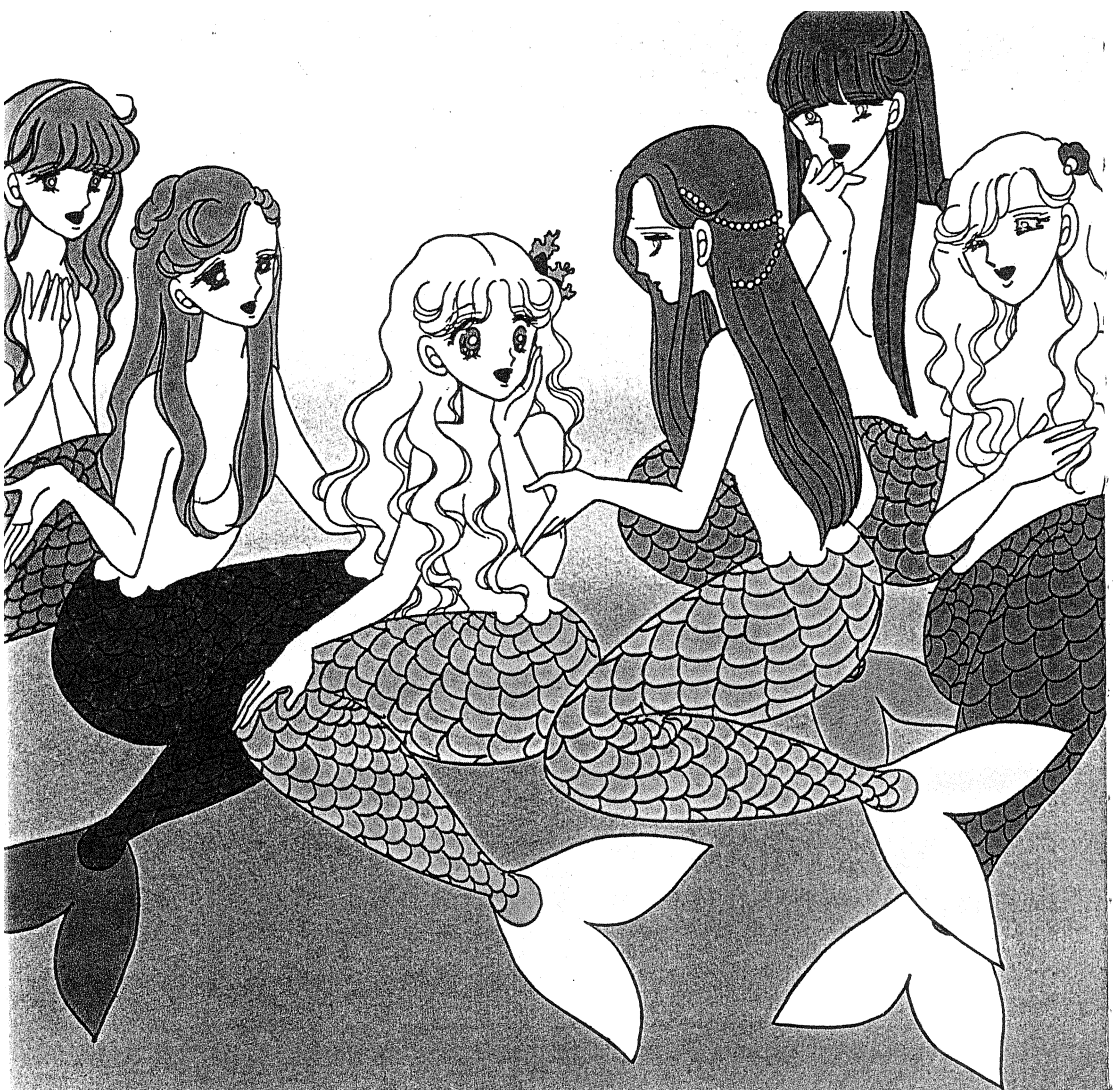
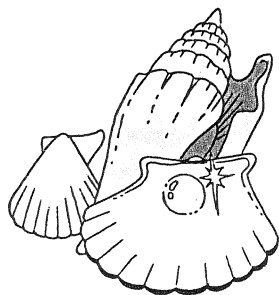
されて いました。

ことは 一ばん 下の にんぎ

よひめが、十五さいになりました。

「うみの 上って どんな ところ

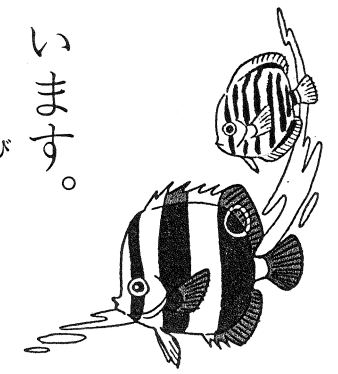
かしら。」

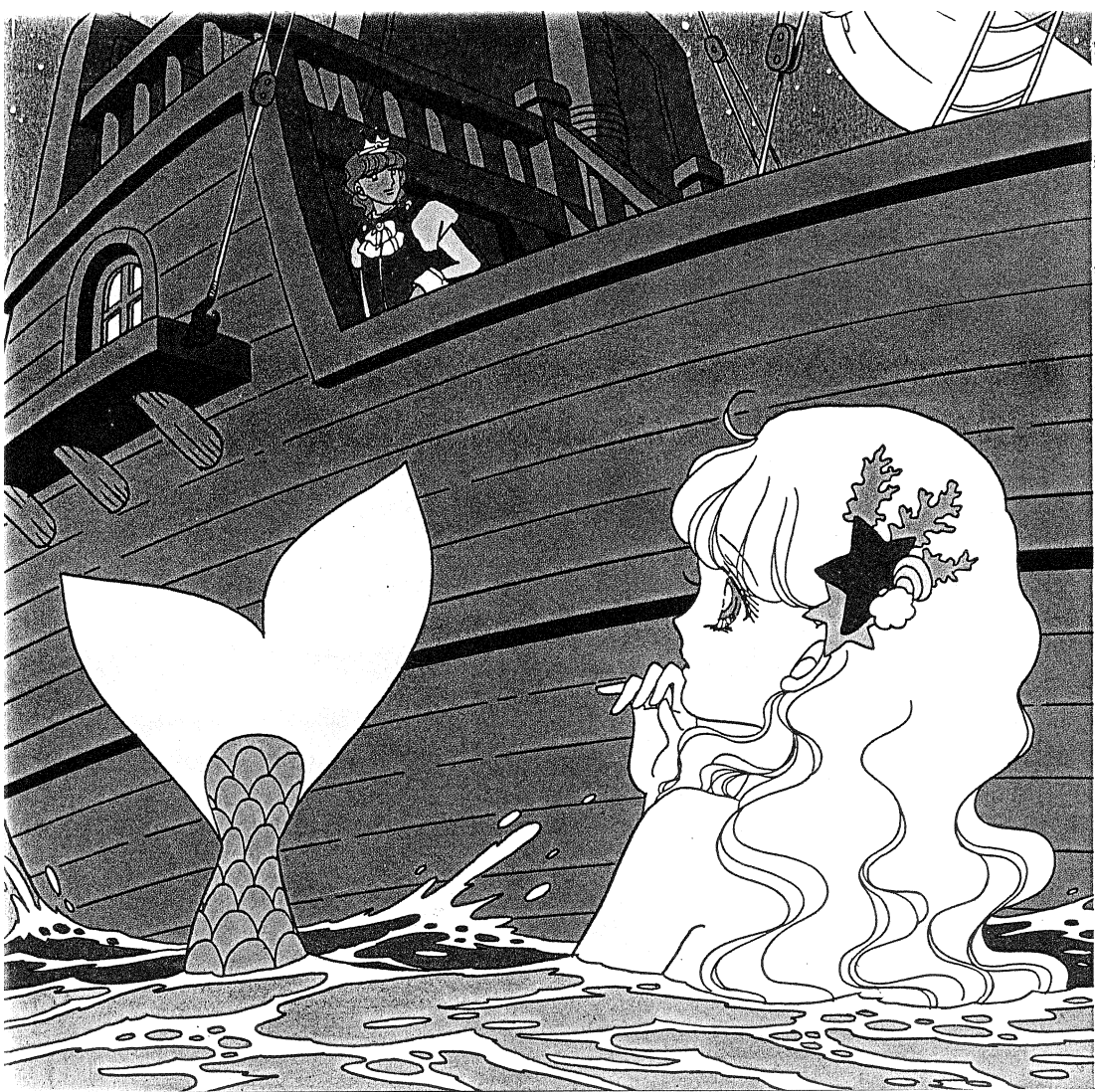




うみの 上<sup>うえ</sup>へ むかいました。  
いもうとの にんぎよひめは  
ります。」「  
「ありがとうございます。では、いってま

たのしみに して います。  
いよいよ たんじよう日<sup>び</sup>です。  
「おたんじよう日<sup>び</sup> おめでとう。」「  
「ありがとうございます。では、いってま





くも きこえるわ。  
「まあ きれいだ。すてきな おんが

ひらかれて いるのでした。  
す。その くにの 王子さまの  
たんじょう日の パーティーが  
空には 花火が あがっていま  
うかんで いました。

うみの 上には  
大きな ふねが





にんぎよひめが

ふねに ちかづくくと、

ふなべりに 王子さまが

あらわれました。

「なんと 男らしい りっぱな

おかたでしょう。」

にんぎよひめは おもわず うっ

とりと 王子さまに みとれて

しまいました。



そのとき

とつぜん くろい

くもが ひろがって、

うみは 大<sup>おお</sup>あらしに なりました。

ふねは 大<sup>おお</sup>ゆれに ゆれて、しず

んで しまいました。

「王子<sup>おうじ</sup>さま、しっかりして。」

にんぎよひめは 王子<sup>おうじ</sup>さまを

たすけて およぎます。



やがて

あらしは やみました。

にんぎよひめは

やつとのこと はまべに

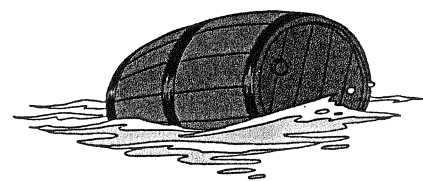
たどりつきました。

「もう だいじょうぶです。」

にんぎよひめは、そう いうと、

つかれきった からだを きしべに

よこたえました。





うつくしい

むすめが

あるいて きます。

にんぎよひめは いわかげに

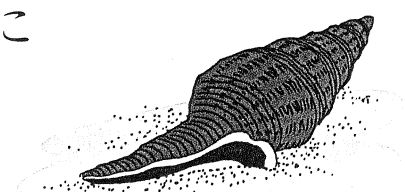
かくれました。むすめは 気を

うしなっている 王子<sup>おうじ</sup>さまを 見<sup>み</sup>て、

たすけを よびに いきました。

「王子<sup>おうじ</sup>さま、はやく 目<sup>め</sup>をあけて。」

にんぎよひめは いのりしました。



むすめが

もどって

きました。

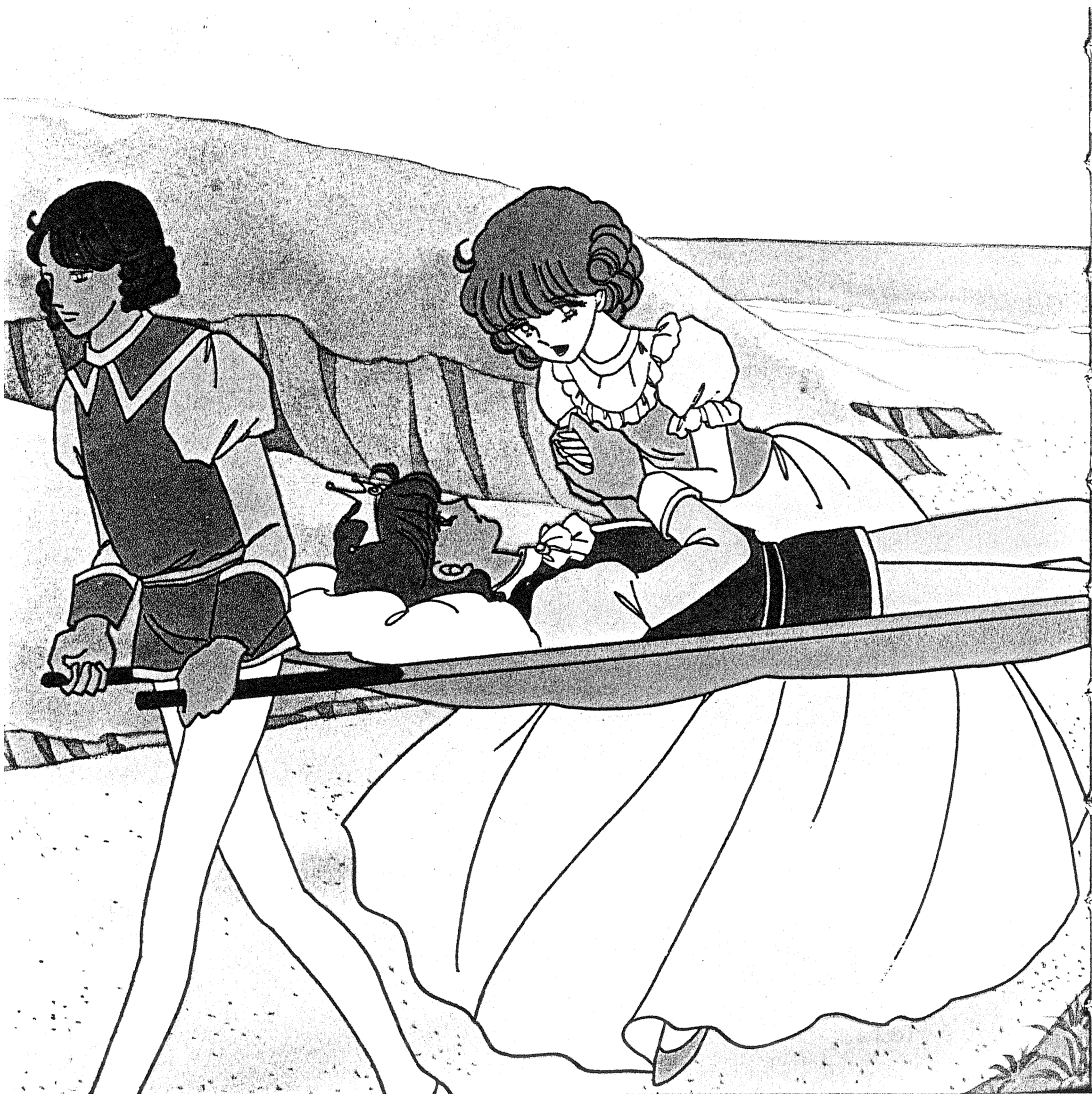
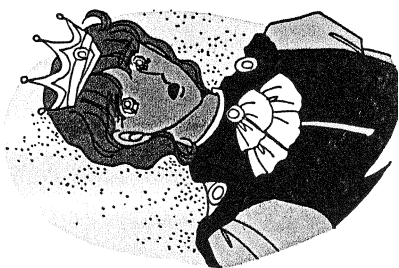
その とき、 王子<sup>おうじ</sup>さまは 目<sup>め</sup>を

ひらきました。

「おお、あなたが たすけて くれたのか、ありがとう ありがとう。」

王子<sup>おうじ</sup>さまは、 むすめの 手<sup>て</sup>を

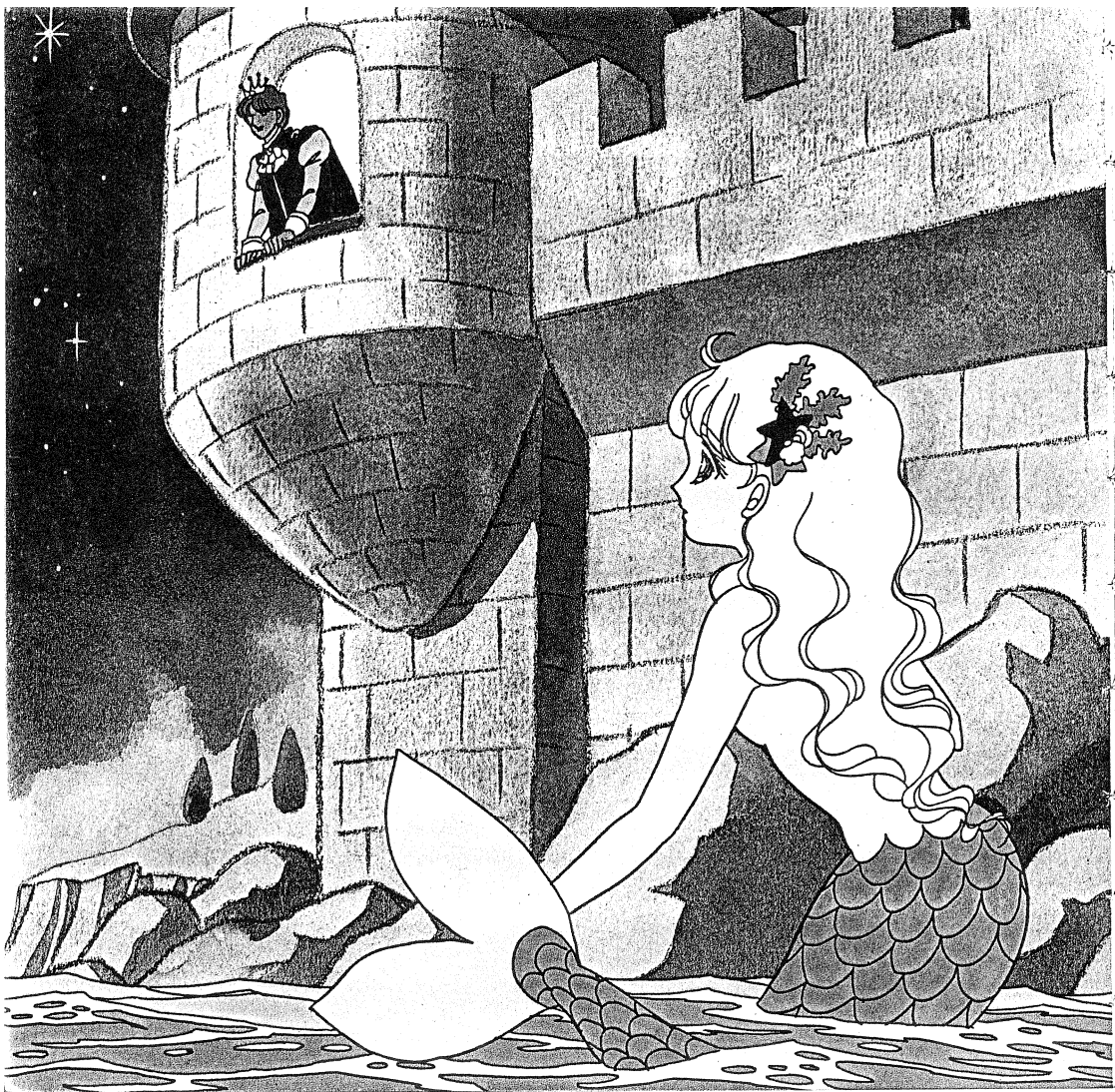
とって おれいを いいました。



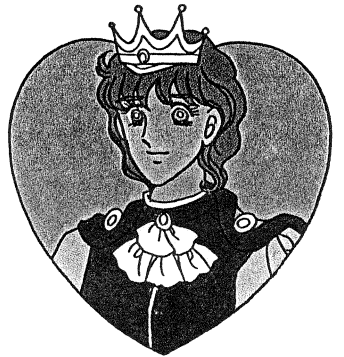
「ちがう、  
わたしが  
たすけたのよ。」

でも 王子<sup>おうじ</sup>さまは しりません。

にんぎよひめは まいばん うみの  
上<sup>うへ</sup>に 出<sup>で</sup>て、おしろの 王子<sup>おうじ</sup>さまを  
ながめて ためいきを つくのでし  
た。まい日<sup>にち</sup> まい日<sup>にち</sup>、そんな 日<sup>ひ</sup>が  
つづきました。



「どうしたの、  
げんきが  
ないのね。」



おねえさんたちが わけを きき  
ます。にんぎよひめは 王子さまの  
ことを はなしました。

「まじよに たのんで、人げんに  
して もらえば、王子さまに あう  
ことが できるわ。」



おねえさんに

いわれて、

にんぎよひめは

くらい うみの 森もりに まじよを

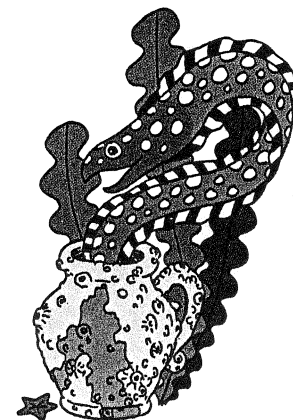
たずねて いきました。

「よろしい。人にんげんに して あげ

よう。ただし、おまえの その

うつくしい こえと ひきかえじゃ。」

にんぎよひめは うなずきました。



まじよは

また いいいます。

「もし おまえが

王子と けっこん できなければ、

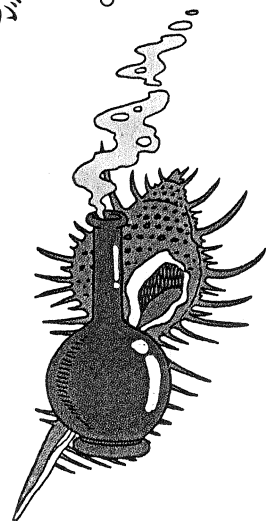
おまえは あわに なって きえて

しまうよ。それでも いいかね。」

にんぎよひめは おどろきました

が、それでも 王子さまに あいた

い 気もちも かわりませんでした。





「ああっ、く、くるしい。  
にんぎよひめは  
まじよに もらった  
くすりを のみ、ききを  
うしなってたおれて しまいました。  
しばらくして き気が つくと、  
にんげんの すがたに なって いる  
では ありませんか。そして あの  
おうじ王子さまが たって います。



王子<sup>おうじ</sup>さまは

ドレス<sup>どれす</sup>をもつて

こさせて、にんぎよ

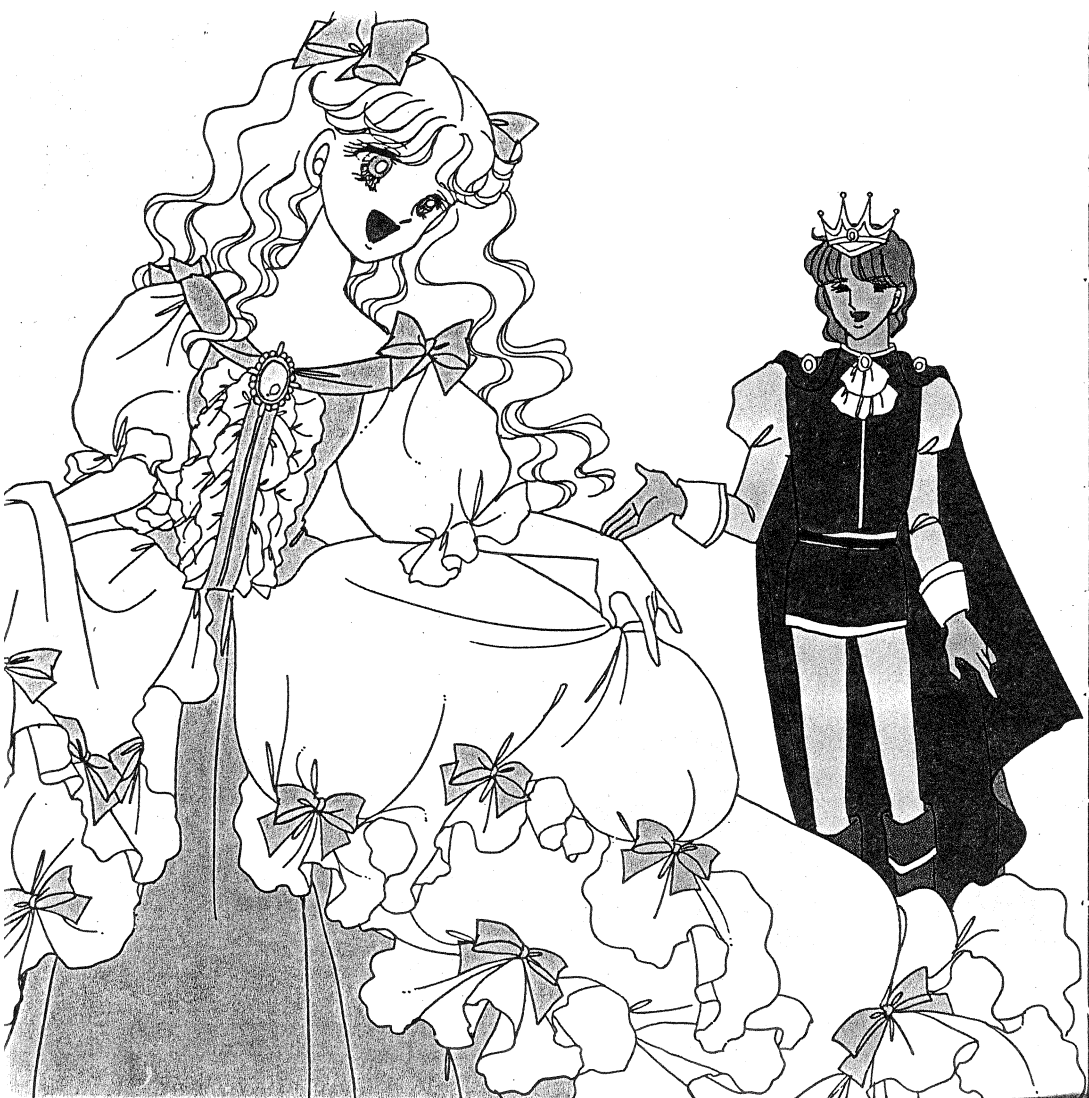
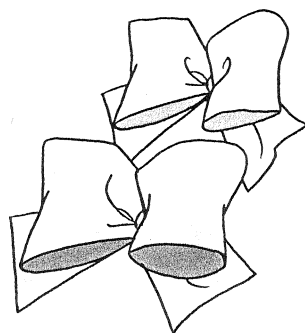
ひめに きせて あげました。

「あ・り・が・と・う・ご……。」

ああ、にんぎよひめの こえが  
出<sup>で</sup>ないのです。

「むりを しないで。げんきに

なるまで おしろで くらしなさい。」







ある日、  
王子<sup>おうじ</sup>さまは  
あの むすめを  
つれて きて いました。  
「わたしは いのちの おんじんの  
この 人<sup>ひと</sup>と けっこんするんだよ。」  
ちがう ちがう、わたしです…。  
にんぎよひめは ころの 中<sup>なか</sup>で  
さけびました。



王子さまを

たすけたのは

わたしなんです。

でも王子さまに わかるはず

は ありません。まじよの こえが

きこえて くるようでした。

「王子と けっこう できなければ、

おまえは あわに なって きえて

しまうよ。それでも いいかね…。」





おうじ  
王子さまと

むすめは、ふねで  
しんこんりようこうに  
でかけました。



おともを した にんぎよひめは  
かなしくて かなしくて、ふなべり  
で ないてばかり いました。

「どうしたの。」

おねえさんたちが たずねました。

わけを きいた

おねえさんたちは、

びっくりして まじよの

ところへ そうだんに いきました。

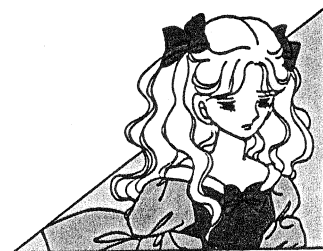
「おまえたちの きれいな かみを

おくれ。そうすれば、いもうとを

たすける ほうほうを おしえよう。」

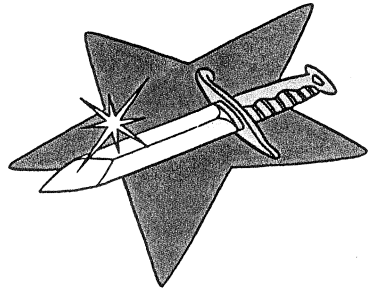
おねえさんたちは まじよの

いう とおりに しました。





おねえさんたちは  
かみと ひきかえに  
たんけんを もらって  
ふねの ところへ もどりました。  
「さあ、この たんけんで、王子さま<sup>おうじ</sup>  
まを さしなさい。そうすれば、  
おまえは あわに ならず、にん  
ぎよに もどれるのよ。」  
王子さま<sup>おうじ</sup>を さすんですって!!



ひと  
人びとが

ねしずまってから

にんぎよひめは 王子<sup>おうじ</sup>さまの

へやへ しのびこみました。

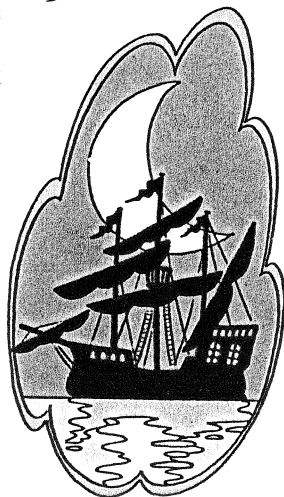
「王子<sup>おうじ</sup>さま、おゆるしく下さい。」

そう 行って、たんけんで さそ

うと しました。しかし それは

できませんでした。王子<sup>おうじ</sup>さまを

ここから あいして いたのです。



にんぎよひめは

たんけんを

なげすてて

へやをとびだしました。

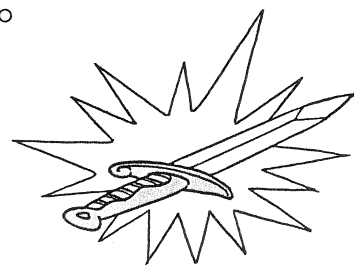
もう あさに なって います。

「王子<sup>おうじ</sup>さまを さすより、わたしが

あわに なって きえましょう。」

そして にんぎよひめは うみに

みを なげました。





「にんぎよひめ」は、デン  
 マークの童話作家アンデルセンの  
 有名な作品です。今でもコペンハ  
 ーゲンの海岸には、アンデルセン  
 をたたえて人魚の座像が建てられ  
 ており、ここをおとずれる人びと  
 はあとをたちません。世界中の子  
 どもに読まれている作品です。

名作アニメ絵本シリーズ®

にんぎよひめ

アンデルセン作

1990年7月5日発行

●製作／(有)アニメ企画 ●構成・文／卯月泰子 ●画／  
 藤田素子 ●発行人／永岡貞市 ●発行所／(株)永岡書店  
 〒176 東京都練馬区豊玉上1の7の14 電話03(992)5155  
 ●印刷／横山印刷 ●製本／大村製本 ●脚色／平田昭吾

1984 Warabe kikaku

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN4-522-01598-4



こころの やさしい にんぎよひ  
 めは うみの あわに ならず  
 天使に 手を ひ  
 かれ  
 空たかく  
 のぼって  
 いきました。